

令和7年度2学期始業式式辞

皆さんお早うございます。校長の井上です。まずもって、この夏休み期間中、大きな事故や災害もなく本日を無事迎えられたことを喜ばしく思います。1学期の終業式では、チャンスをつかむ心構えについてパストールの言葉を引用して話をしました。私は、皆さんに勧めた手前、「魄より始めよ」を心掛けたおかげか、数々の幸運に恵まれ、今回の式辞のヒントも手にすることことができました。今日の話のテーマは「恕の心」です。また恕ですか？と言わずに、5分程度、長くはなりませんからリラックスして聞いてください。

さて、みなさん、「恕の心が大切だとはわかっているけれど、思いやりばかり優先したら、自分のことは後回しになって、困る。」こんな風に考えたことはありませんか。また、「仲の良い家族や友達ならともかく、立場や意見が異なる他人にどうやって恕の心で接したらいいのかわからない。自分ばかり損することになりはしないか。」あなた方、特に心根が優しい人や真面目な人ほど、こう思い悩むはずです。

今日は、この矛盾とも思える状況を説明するのにうってつけのエピソードを思い出したので紹介します。「街場の天皇論」という本の中で内田樹が分析している山岡鉄舟の話です。

山岡鉄舟は幕末から明治にかけて活躍した人物で、勝海舟と西郷隆盛が江戸城の無血開城を行った際に、二人の会談をお膳立てした人物です。皆さんの歴史の教科書にも載っているかもしれません。今から150年ほど昔の話です。

さて、当時の日本は、戦国時代以来260年続いた江戸幕府のメンバーを中心に政治を行いたい旧幕府の勢力と、天皇を中心に政治を行おうとする新政府の勢力が対立をし、国を二分する「戊辰戦争」を戦っていました。旧幕府軍は新政府軍の勢いに圧倒され、いよいよ江戸城への総攻撃が心配される中、旧幕府軍の山岡鉄舟が新政府軍の代表を務める西郷隆盛と交渉し、戦わずに江戸城を明け渡すことに成功しました。これが無血開城の概要です。山岡たちの活躍のおかげで、江戸の町は火の海にならずに済んだと言われています。

なぜ山岡鉄舟は敵である西郷隆盛との交渉に成功したのでしょうか。一言でいえば、山岡鉄舟が優れた人間性の持ち主であったからなのですが、この本ではその部分をこんな表現で説明しています。

「ほんとうに力のある人間は、自分と対面している人間の最良の人間的資質を引き出すことができるのである。」

立場の異なる相手とうまくやっていきたければ、まずは相手の立場に立って考えることが大切である、とよく言います。しかし、同時に相手にも自分の立場に立って考えてもらわなければならない場面があります。恕の心に引き付けて言うと、自分が恕の心で相手に接するだけでなく、相手にも恕の心で応えてもらう必要があると言えるでしょう。山岡鉄舟は武士であり論語を学んでいたはずですから、日々、恕の心を実践すべく鍛錬していたと思います。西郷隆盛との会談でも、恕の心で接することで、西郷の最良の人間的資質、すなわち恕の心を最大限、引き出すことができたのでしょう。

ほんの一時だけ人に優しく接するだけなら、さほどの苦労を伴うこともないでしょう。し

かし、恕の心を本気で実践しようとなれば、もちろん優しさは必要ですが、我々自身が学力・体力はもちろんのこと、忍耐力、信念、自律心、挑戦する力など、様々な力を備えた高い人間性を発揮できる人物でなければならぬのです。自らが自らの力で自らの人生をしっかりと歩んでいけるだけの力が必要なのです。

こう考えると、恕の心の本質が見えてきます。単に人に優しくすることではありません。自分を磨くことも恕の一部、磨けば磨くほど自分も相手も幸せになるのです。我々は、恕の心を存分に発揮できるよう、自分自身を高めていかなければなりません。

さて、最後に残る疑問は、山岡鉄舟のような力のある人間にしか、恕の心は実践できないのか、という疑問です。私はそうではないと思います。我々は、自分が無理なく実践できる恕の大きさはどれくらいなのか、試行錯誤を繰り返して感じることができます。思いやりを発揮したら、なんだか疲れてしまった。人を助けたら逆にたくさん助けてもらえた。こうした経験を繰り返しながら、実践できる恕の心を少しづつ大きくしていけばよいと考えます。

なお、恕については論語に依拠した解説を、前任の瀬尾校長先生が3月の卒業式式辞の中でお話になっており、忠恕の教えとしてホームページにも掲載されているので、改めて紹介しておきます。

結びに、今日から二学期が始まります。生活リズムを整えて、まずは今日と明日の考査に全力で取り組むとともに、来週からは学校祭を大いに楽しみましょう。

この2学期が皆さんにとってさらなる成長の時となることを祈念して、式辞とします。